

第1回 神戸市外国語大学の今後のあり方検討委員会 議事要旨

日時：令和8年4月7日（火）14時40分～16時10分

場所：神戸市外国語大学 三木記念会館

委員出席者

足立 泰美 甲南大学経済学部教授
佐伯 里香 株式会社ユーシステム代表取締役、こうべ産業・就労支援財団
評議員
勢一 智子 西南学院大学法学部教授
田村 秀 長野県立大学グローバルマネジメント学部教授
中岡 司 宝塚大学学長、京都市立芸術大学客員教授
平野 浩之 秋田県立大学副理事長
和田 孫博 兵庫県私立中学高等学校連合会理事長

神戸市外国語大学出席者

田中 悟 神戸市公立大学法人副理事長兼神戸市外国語大学学長
岡山 裕司 神戸市公立大学法人理事兼事務局長
林 範彦 神戸市外国語大学副学長

事務局出席者

西尾 秀樹 企画調整局長
吉田 高志 企画調整局部長（大学連携推進担当）
梅林 寿嗣 企画調整局大学・教育連携推進課長
木村 貴洋 企画調整局大学・教育連携推進課係長

1. 開会

2. 委員等紹介

3. 議事（1）会長の選出

委員の互選により、田村秀委員が会長に選出された。

4. 議事（2）傍聴要綱の決定

資料3について、異議なく原案のとおり承認された。

決定された傍聴要綱に基づき、会長が「報道機関に限り、外部への公表・提供をしないことを前提に、会議全体を通して、録音を許可すること」を委員に諮り、承認された。

5. 議事（3）委員会への諮問及び附属機関の進め方について

事務局より、資料4・5に基づき、諮問内容及び附属機関の進め方について（案）の説明があった。

その後、附属機関の進め方（資料5）について、異議なく原案のとおり承認された。

6. 議事（4）神戸市外国語大学ヒアリング

神戸市外国語大学より、資料6に基づき、同大学の概要（特徴と強み、主な地域貢献の取組）について説明があった。

その後、各委員から意見及び質問が出され、これに対し、神戸市外国語大学から回答があった。

<委員>

- ・卒業生の市内就職率が、2024年度の卒業生では約8%と市内大学の平均（同年度：約15%）を大きく下回っているが、大学として、この状況をどのように受け止めているのか。

<大学>

- ・ご指摘のとおり、市内就職率は低水準にとどまっているが、今後学生に神戸の魅力を感じてもらい、機会を通じて地元定着に繋げていきたいと考えている。一方で、全国から学生を集めていることが本学の特徴である。全国から集まる学生の地元定着をいかに図るかは重要であり、現状では過去3か年の市内就職者のうち、近畿圏外出身者が約3割を占めている。
- ・また、一度市外に出た後に市内へ戻ってきてもらうことも、地元定着という観点では、重要であると考えており、いわゆる関係人口も意識しながら取組を進めていきたい。

<委員>

- ・市内就職率が単年度ではなく継続して低水準であることに驚いた。産業界は人手不足であり、外国人材の育成にも苦慮している。本来であれば、同大学の学生が市内企業に就職することで、こうした課題の解決に寄与できる部分もあると感じるが、具体的に市内就職率を高めるため、市内企業との接点を増や

すような取組は行っているのか。

<大学>

- ・一定数、地元就職志向の学生がいることから、ヒアリングにより希望する職種等を把握したうえで、市内企業とのマッチングを実施している。今後も、市や経済界とも協力しながら、地道な取組を通じて、少しでも市内就職率を高めていきたい。

<委員>

- ・企業との接点が少ないと感じる。市内企業への貢献という意味では、より具体的な取組がほしい。

<委員>

- ・素晴らしい取組が行われていると感じたが、そうした情報が十分に周知されていないのではないか。
- ・教育界では教員不足が顕著である。どの程度の学生が教職課程を履修しているのか。また、そのうち、兵庫県内又は神戸市内で教員として採用された者は何人いるのか。
- ・公立、私立を問わず、地元高校に対する学生募集の広報（入試広報）はどのように行っているのか。

<大学>

- ・教職課程については相当数の学生が履修しており、一定数の英語教員を輩出している。（施設見学でご覧いただいた）教職課程のサロンを設けたり、教職課程の悩みに関するチェックシートを作成したりしながら進めており、2024年度の教員免許の取得者は45名となっている。
【→次回の会議で、改めて資料により報告することとされた。】
- ・入試広報については、パンフレットの作成・配布に加え、実際に高校に出向いて進路指導教員に説明を行うほか、模擬授業も実施している。こうした取組を通じて、一人でも多くの受験生を確保したいと考えている。

<委員>

- ・コース制の再編により、語学+ α の専門教育に取り組んでいると説明を受けた。現在では、語学ができるだけでは活躍できないようになってきている。また、グローバル対応は各大学でも力を入れている。神戸市外国語大学では、2021年度のコース制の再編により、成果や効果が出ていれば教えてほしい。

- ・地元貢献の取組について、他の委員からも「はじめて知った」との意見があったが、いつ頃から力を入れているのか。
- ・市内就職率が、市内からの入学者の割合を下回っており、数字上では市外に人材が流出しているように見える。他方で、全国から学生が集まってきているとのことであり、関係人口というキーワードも出ていたが、一度神戸市外で就職した後に、再び神戸に戻ってきた卒業生が実際にどの程度いるのか、件数は把握しているのか。

<大学>

- ・コース制に関しては、設立当初から高度な外国語運用能力と人文・社会科学系の専門知識習得を両輪として、質の高い学生の育成に努めてきた。語学+αの教育は非常に重要になっており、これを高めるために2021年度にコース制の再編を行った。コース制の再編後、まだ十分な期間が経過していないこともあり、明確な数値データに基づく検証には至っていないが、一定の成果はあったものと考えている。
- ・地域貢献の取組については、新たな試みとして、組織的に取り組み始めたのは比較的最近であるが、例えば語学ボランティアなどはかなり以前から実施している。
- ・市外で就職した卒業生が戻ってくる事例は相当数耳にするが、個人の追跡調査は難しく、できるだけ同窓会の組織とも連携してやっているが、数値データとしては未整備な状況。ただ、戻ってくる学生は相当数いると感じている。

<委員>

- ・いずれも、市が公立大学を設置する意義という観点から質問させていただく。
- ・先ほど、全国から学生を集め、その人材が広域的に活躍しているとの説明があった。地方財政の観点から市が財政負担を担う一方で、その便益は広域に及ぶという構造が見受けられる。広域的な人材育成と、基礎自治体による設置という関係をどのように整理しているのか。
- ・令和7年2月の中教審答申においても、高等教育システムの再構築が示されている。人口減少社会において大学間競争が進むことが想定される中、大学の機能や役割の再定義は必然であると考え。多くの大学が語学と専門性の組合せを強化する中で、同大学の強みであった領域も、必ずしも固有のものではなくなってきている。こうした中で、市があえて単独で外国語大学を設置し続ける意義をどのように考えているのか。
- ・公立大学として、教育研究成果の地元への還元は特に重要であると考え。近隣には、同様の学部を有する大学が集積しており、今後も競合が見込まれる。

地元への還元についても、先んじて取り組んでいくうえで近隣大学の事例も踏まえて考えていく必要があるが、大学としてどのように他大学の動向を見極めて取り組んでいるのか。

<大学>

- これまで「行動する国際人」をミッションとして大学運営を行ってきた。その中で、全国各地から優秀な人材を集める一方で、神戸市内枠を設けて一定数の市内出身者を確保しており、こうした多様な背景を持つ学生がともに学ぶことにより、互いに切磋琢磨し、全体として水準が高まっていくものと考えている。そうして育った人材を地元へ輩出し、神戸市に定着してもらうことが理想であり、それによって神戸市自体の魅力向上にもつながるものと考えている。財政的な論点はあるかと思うが、中長期的に見れば、こうした教育環境は質の高い人材の育成・確保に資するものと考えており、神戸市や経済団体とも連携しながら、市内定着率を少しでも高めるとともに、今後も優秀な人材を神戸市に集めていきたい。
- 他大学との違いについては、卒業時の TOEIC 平均得点が約 800 点であることにも表れているように、高度な外国語能力を有する質の高い学生を送り出している点が、本学の大きな特徴であると考えている。また、文系の単科大学であることから、総合大学と異なり、教員と学生、また学生同士の距離が近く、切磋琢磨する文化の形成につながっており、質の高い教育に一定程度寄与しているものと考えている。

<委員>

- 本来、公立大学は社会的要請を踏まえて設置されているものと考えているが、大学の中期計画を見ると、市への貢献や市との連携への言及が非常に薄いように思う。これまで市との関係をどのように意識してきたのか。
- 市内就職率が他大学と比べても著しく低いと考えている。地元企業の求人と、外国語を主とする大学の人材育成方針との間にミスマッチが生じているのではないかと。

<大学>

- 現在 2 年目を迎えている第 4 期中期計画においては、神戸市が直面する様々な社会課題の解決に向けて、両教育機関（神戸市外国語大学・神戸市立工業高等専門学校）が有する多様な知見を積極的に活用し、学生の参加や産官学連携を図りながら主体的に活動するとともに、両教育機関の知見を市民に還元し、市民生活の質の向上に寄与していくことを基本方針としている。これを踏ま

え、神戸市と連携した取組の実施件数を年々増やしていくことや、地元企業のインターンシップ情報を学生に年間 50 件以上提供することなどを数値目標として掲げている。

- ・本学の学生は目が外に向いている傾向があるが、神戸市にはグローバルに活動する企業も多い。特に海外との接点がある企業とのマッチングについては、学生のニーズとも適合すると思われる。今後も学生のニーズを汲み取りながら、企業と連携し、少しでもミスマッチを防ぐよう取り組んでいきたい。

<委員>

- ・国際系の学部を有する大学が増えてきており、近隣では甲南大学、立命館大学、東京では国際基督教大学、秋田では国際教養大学など、語学にとどまらない強い特色を持った大学もある。一方で、神戸市外国語大学については、留学生が少ないほか、コース制により専門性についても高めているとの説明はあったが、専攻するコースごとの学士を授与できるわけではない。そのため、他大学との差別化という点でなお弱いのではないかと感じる。こうした状況について、大学として危機感を持っているのか。

<大学>

- ・学士課程は留学生が少ないが、大学院に多くの留学生が在籍しているほか、日本語プログラムでは短期留学生を受け入れており、日本人学生との交流も生まれている。学士課程における留学生の確保は課題であると認識しているが、入学時に求める日本語能力の水準が高いことも留学生数が少ない一因と考えられる。そのため、教育の質を維持しつつ、どのように留学生を確保していくかについて検討を進めている。

【→次回の会議で、留学生数等を資料により報告することとされた。】

<委員>

- ・将来的には、国公私の授業料負担が次第に均衡化していくと予想しているが、その中で大学が持ちこたえられるのかという視点で見ている。
- ・ご説明いただいた様々な取組について、いわゆる大学改革の3ポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）を反映したものなのかが、資料上では見えにくい。例えば、模擬国連や Alumni プロジェクトなどは、ポリシーに基づいて学生全体に対して行っているものなのか、それとも特定の関心を有する学生に対する取組にとどまっているのかという点を、明確にする必要があると感じた。
- ・基礎自治体が運営している一方で、その便益は全国に広がっているという指

摘は、別の委員からもあった。仮にこの問題意識を払拭するのであれば、大学が掲げる「世界と神戸を力強く結ぶ架け橋」の役割が重要になるが、その役割を果たしているかを判断するための指標を明らかにすべきではないか。

<大学>

- ・危機意識は学内でも共有しており、キャッチフレーズである「行動する国際人」の養成に向けて、3ポリシーを再編成し、科目を整理する作業を現在進めているところである。
- ・「世界と神戸を力強く結ぶ架け橋」を立証する指標は現時点では持ち合わせていないが、今後、学内でも検討を進め、一つの指標として整理していきたいと考えている。

<委員>

- ・資料6の1.(5)②に記載されている研究業績が特定の教員に偏っているように思うが、何か理由があるのか。
- ・専任教員数(約80名)に対して、公共団体等の理事・委員への就任が14件というのは少ないと感じる。他の大学では、教員によっては20件以上担っている例もあり、社会とのつながりという観点から見ても、物足りない印象を受ける。

<大学>

- ・研究業績の記載については、英語教育学という分野に限定しており、同分野の専任教員数は限られているため、比率として著しく偏っているというわけではない。

7. 議事(5) その他

事務局より、資料8に基づき、インタビュー調査の実施に関する説明があった。その後、異議なく承認され、事務局においてインタビュー調査を実施のうえ、次回の会議で、事務局よりその結果について報告することとされた。

8. 閉会